紅茶協会

「紅茶の日」に記念ティーセミナー

インフル予防効果報告

日本紅茶協会は「紅茶の日」として制定されている1日、これを記念するティーセミナーを東京・港区の明治記念館で開催した。紅茶の啓もう促進の一環として行ったもので、おいしい紅茶のいれ方やテイスティングのほか、近年注目を集めている紅茶のインフルエンザ予防効果に関する講演会を実施。また紅茶好きのタレントで知られる岡田美里氏（ジャムオブワンダーACパークス社長）がトークショーを行うなど、華やかな雰囲気での開催となった。（村岡直樹）

阿部　庸行会長

会場で、阿部庸行会長（三井農林社長）は「『紅茶の日』は1791年、伊勢国の大黒屋光太夫が日本人として初めて紅茶を飲んだことに基づき制定された。以後、紅茶は日本に定着しているが、協会ではこれらの普及・啓もう活動を行っている」とあいさつ。また「最近、紅茶の生産大国であるスリランカとインドを視察した。現地での飲み方をヒントに自宅でカボスを絞って紅茶を飲んでみたところ、おいしかった。紅茶の飲み方は無限の可能性があると改めて思った」と述べた。

インフルエンザと紅茶に関する講演会では、国立感染症研究所の中山幹男医学博士が「紅茶のインフルエンザに対する感染伝播阻止効果」の研究成果を報告。コーヒーや緑茶、ココアとの比較検査で紅茶はインフルエンザウイルスの殺菌作用で突出しており、……岡田美里氏のトークショーなども華やかな雰囲気を醸し出した

1時間ごとに紅茶を飲むことで、新しく生まれたウイルスを殺菌できるという。また、うがい薬と異なり吐き出す必要がないことから、非常に実践的な予防対策になることを説明した。

岡田美里氏のトークショーでは、紅茶と縁が深い陶磁器や海外での紅茶の飲み方などを分かりやすく紹介。ロイヤルコペンハーゲンの歴史や特性を自身の経験を交え楽しく説明したほか、ティーパーティーで役立つ豆知識や喜ばれる紅茶のいれ方などを講演した。

ティーセミナーでは、協会認定のティーインストラクターである田丸敦子氏、中村直美氏が「おいしい紅茶のいれ方と楽しみ方」を実演を交えて説明。前準備や蒸らし時間、注ぎ方やトッピングなど家庭でもできるおいしいいれ方を分かちやすく伝えた。

（日本食糧新聞 H23.11.9）

飲むだけでインフル防ぐ

日本紅茶協会セミナー

日本紅茶協会は11月1日、紅茶の日記念ティーセミナーを明治記念館で開催。講演やトークショー、紅茶のテイスティングなどが行われた。

阿部庸行会長（三井農林社長）＝**写真**＝は「協会では紅茶の普及宣伝事業、ティーインストラクター、ティーアドバイザーの養成、残留農薬の対応など様々な機能を果たしている。本日は紅茶によるインフルエンザ対策など様々な企画を用意しているので、参加者の皆様には楽しんでほしい」と語った。

講演では国立感染症研究所協力研究員で医学博士の中山幹男氏が演題「紅茶のインフルエンザに対する感染伝播阻止効果」において、「紅茶はインフルエンザウイルスを10秒で殺す」とし紅茶を飲むだけでインフルエンザを予防できると説明。また、紅茶の飲用はワクチンの生産が間に合わない新型インフルエンザに対しても有効で、感染者の口の中のウイルスも死滅させるため、せきなどの飛沫による感染拡大も防げると語った。留意点としては、ミルクティーでは効果は消えるが、レモンティーでは効果が数倍になることを挙げた。

当日はタレントでジャムオブワンダーACパークス社長の岡田美里氏が自身の体験を交えて紅茶にまつわるエピソードを紹介。さらに協会認定ティーインストラクターによるティーセミナー「おいしい紅茶のいれ方と楽しみ方」、4カ国（インド・ダージリン、スリランカ・ウバ、東アフリカ・ケニア、インドネシア・ジャワ）の紅茶のテイスティングが行われた。

（フードウィークリー H23.11.28）

紅茶飲用でインフル予防

口中10秒でウイルス無力化

日本紅茶協会

「紅茶に強いインフルエンザ感染予防効果」があることが分かった。日本紅茶協会が1日開いた「紅茶の日記念ティーセミナー」で、国立感染症研究所・協力研究員の中山幹男医学博士が講演し、「紅茶を飲むだけで口中のウイルスを無力化できる」との研究結果を示した。

講演する中山幹男氏

試験は紅茶、緑茶、ウーロン茶のティーバッグと、粉末を溶いたココア、インスタントコーヒー、緑茶で、抗インフルエンザ活性を測定した。

紅茶、ウーロン茶、緑茶の順に効果が高く、粉末緑茶、ココア、コーヒーには効果が認められなかった。

紅茶は特に効果が高く、通常飲用の5倍に希釈しても、わずか10秒でウイルスを無力化。10倍に希釈すると緑茶はほぼ効果がないが、紅茶には一定の効果が認められた。

インフルエンザウイルスは、表面の突起物で体内に侵入（感染）するが、茶ポリフェノール成分のガレート基が突起物に取り付くことで感染を防ぐ。

中山氏は①紅茶はインフルエンザウイルスを10秒で無力化②飲用するだけで口中のウイルスを無力化③インフルエンザの型を問わず、すべてのインフルエンザウイルスに効果④罹患した患者が紅茶を飲用することで飛沫感染の拡大を抑制⑤うがい薬と違い吐き出す必要がないので、車内などどこでも飲用できる、とまとめた。

さらにレモンティーにすると効果が数倍高まる一方、ミルクティーは効果がなくなるという。

日本紅茶協会では、中山氏監修「紅茶とインフルエンザ予防」のポスターを作成している。

（食料醸界新聞 H23.11.14）

紅茶の日記念ティーセミナー

「紅茶とインフルエンザ」テーマに講演

日本紅茶協会は「紅茶の日」の11月1日、明治記念館で「紅茶の日記念ティーセミナー」を実施した。講演会（テーマ『紅茶とインフルエンザ』／国立感染症研究所協力研究員中山幹男氏）、トークショー（ジャムオブワンダーACパークス岡田美里代表）、ティーセミナー「おいしい紅茶の入れ方」（ティーインストラクター田丸敦子／中村直美）、4カ国の紅茶のテイスティングなどを行った。

開会に先立ち阿部庸行会長は、「11月1日『紅茶の日』は寛政3（1793）年のこの日に、伊勢国の船頭・大黒屋光太夫がロシアの首都ペテルブルクで、女帝エカテリーナによる茶会に招かれ、日本人として初めて紅茶を飲んだ日と考えられており、その史実に基づいて昭和58（1983）年に制定された」と挨拶。

「紅茶の日記念セミナー&テイスティング」に先立ち挨拶に立った日本紅茶協会の阿部庸行会長

中山幹男講師

引き続き、昨年11月にスリランカ、今年9月にインドを視察した産地の最新事情を紹介した。

講演会では中山氏が「紅茶のインフルエンザに対する感染伝播阻止効果」を説明。紅茶、緑茶、ココア、コーヒー、烏龍茶の各試験液の抗インフルエンザ活性の測定結果から、「紅茶は、インフルエンザウイルスを10秒で殺す」「新型インフルエンザのような急速な感染拡大に対してはワクチンが間に合わず、感染を広げないためには紅茶の出番」だと主張。「インフルエンザに罹った患者さんが、紅茶を飲めば患者さんの口の中のウイルスが死滅する。従って、咳をしてもその飛沫を吸い込んだ人にインフルエンザをうつさない」。

そのためには「1時間ごとに紅茶を繰り返し飲む」こと。また「紅茶は市販のうがい薬と違って吐き出す必要もなく、電車内などどこでも飲める」と持説を展開した。最後に「紅茶を飲んで健康な毎日を送って欲しい」と締め括った。

（帝飲食糧新聞 H23.11.9）

紅茶協「紅茶に抗インフルエンザ効果」
11月1日紅茶の日記念セミナー

日本紅茶協会は1日、11月1日の「紅茶の日」を記念したティーセミナーを都内で開催。国立感染症研究所の中山幹男協力研究員が「紅茶とインフルエンザ」と題した講演を行ない、「紅茶の抗インフルエンザ効果」について発表した。

席上、阿部庸行日本紅茶協会会長は、「紅茶の日1791年に大黒屋光太夫がロシアでエカテリーナ2世に謁見したしたことを記念に制定。紅茶は様々な種類や飲み方がある。講演やセミナー、テイスティングを楽しんでほしい」とあいさつした。

講演では、「紅茶とインフルエンザ」と題し、三井農林がNPO法人バイオメディカルサイエンス研究所に委託した紅茶の最新研究の成果を発表した。今回の試験では、紅茶、緑茶、ウーロン茶のティーバッグ、ココア、コーヒーの粉末を通常の濃度で淹れ、新型インフルエンザと混合し、抗インフルエンザウイルス活性について測定。結果、紅茶はインフルエンザを10秒で無力化し、緑茶、ウーロン茶よりも際立った効果が見られた。さらに、飲用濃度の5倍まで薄めても、99.99%死滅させる効果があることがわかった。インフルエンザは表面に「スパイク」という突起物を持つが、紅茶に含まれる「紅茶ポリフェノール」がそのスパイクに取り付いて感染力を奪う仕組み（効果は試験管内）。また、効果は、ミルクを入れると効果が消えてしまうが、レモンを入れると効果が高くなるという。中山研究員は、「紅茶はインフルエンザの種類を問わず、口の中のウイルスを死滅させる効果がある。1時間ごとに紅茶を繰り返し飲んでほしい」と話した。

（日刊食品通信 H23.11.2）